

### 第3章

ひととまちとのいい関係

# ご近所。パワーの 新しい風

## ●神奈川区／白幡緑の会

### 住民参加の森づくり

「この山の緑を いつまでも美しく残すために 私たちが草刈りや清掃をすることを横浜市と約束しましたので 皆さん協力してくださいね。『白幡緑の会』」

平成二年六月発行の「ニュース白幡の森」には、こんな呼びかけのついでに、東急東横線・東白楽駅から徒歩で約十分神奈川区白幡地区では、町内の「白幡の森(六六四九号)を舞台に、いま新たな地域コミュニティづくりが進行中である。

近年、地域コミュニティの役割が再評価されている。労働時間の短縮などによって、家庭で過ごす時間が増えたために、いままでの仕事中心の生活を見直して、自分が住んでいる周辺の環境に目を向けようとする動きが生まれてきた。そして、そこからこ

れまでの町内会活動の枠を超えた、新しい地域コミュニティづくりの機運が芽生えている。「白幡緑の会」は、そんな時代に生まれた、新しいご近所活動のひとつといえる。

静かな住宅街をぬって行くと、こんもりした林とならかな斜面にぶつかると、そこが「白幡西緑地」だ。斜面は段々畑になっていて、ジャガイモ、サツマイモなどが栽培され、人寄せイベントの目玉(イモ掘りなど)として手厚く管理されている。斜面を上りつめると、緑地のシンボル、通称「ターザンの木」と呼ばれる大きなエノキの木。あたりにはクスギ、コナラなどの林のほか、ススキやヨモギが繁茂する草地もある。「虫が住まなくなるから」という子どもたちの要望で、あえて刈らない。アスレチック用遊具も階段も、みんな地域のお父さんたちの手作りだ。

ことの発端を、「緑の会」会長・中沢寿夫さんはこう語る。

「ここは、もともと西町山と呼ばれていましたね。かつては畑でしたが、耕作をやめて荒地地になっていきました。そこで、なんとか緑地として残そうと考え、市に土地を購入してくれるようお願いをしたわけです」

そこで平成元年に、「市街地緑の景観確保事業」により「白幡西緑地」として横浜市の買い取りが決まった。そして従来の、管理・運営は行政、利用は市民という構図をやめ、利用する市民が市の援助を受けて管理もする方式をとる。そのため、まず町内会の役員さんや子ども会のお母さんたちが「白幡の森を考える会」を結成。この緑地のよさを住民に理解してもらい、その活用方法を探るための活動を開始した。

### 地域コミュニティの再発見

ワークショップ形式による森づくりの活動には、市と公園づくりのプロも参加。しかし、あくまで町内会主体の、従来の公園とはひと味もふた味も違う緑地空間づくりが始まる。このユニークなところは、大人も子どもも同じ発言権を持っていること。何度でも自由参加の会合が開かれ、新聞の発行や野外パネルの展示などにより、会合に参加できなかった人にも十分に情報がゆきわたるよう工夫がされた。

ワークショップの最初のイベントは、「みんなて森のよさを見つけよう」という

●2010年頃の望ましい地域との関わり方 (複数回答)

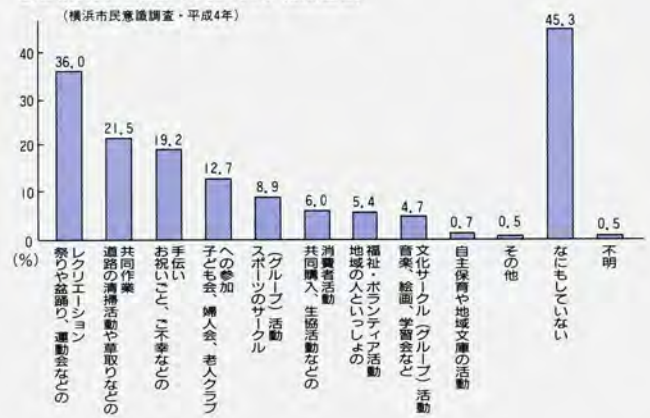
(よこはま3万人アンケート・平成4年)



テーマのもとで「森の資源マップ」づくり。子どもたちには、それぞれ森にある自分の「宝もの」を見つけてもらった。参加した八九人の子どもたちは、カマキリやドングリ、カラスウリなど、さまざまな動物植物を

●地域の行事・活動への参加状況 (複数回答)

(横浜市民意識調査・平成4年)





遊具づくりに汗を流すお父さんたち。手づくりの共同作業から地域との接点が生まれる



町内会が主体となつて行われたワークショップでは、大人も子どもも一緒になつて地域の自然環境を考えた



見晴らしのよい高台にそびえるターザンの木。白幡地区のシンボルだ



「イモ掘り」は、地域コミュニティ活動にとつても大きな収穫だ

たくさん集めてきたが、中には大きなミミズや木の洞穴を見つけた子もいて、「大人には思いもよらない発見でした」と中沢さん。以後もプラン作成に参加した子どもたちは、自分たちの意見が地域づくりに生かされていくように目を輝かせた。

その後、「白幡緑の会」と名を変えたこの組織には、現在、八つの町内会からなる白幡地区連合会を中心に、地元消防団や青年団、子ども会、浦島小学校、県立母子保健センターなども参加。市の助成を受けて、イベントや緑地の整備などを行っている。

前述した畑のイモ掘りは、お母さんたちの丹精のたまもの。各町内会ごとに交代で手入れをしている。収穫祭は毎回大盛況。昨年秋の収穫祭には、八〇〇人も参加者でとうとう掘るイモがなくなつてしまったそう。力仕事はお父さん。大工さんの叱咤と家族の激励を受けながら、大勢のお父さんたちが「市民の森」からもらうけた間伐材で、遊具や階段づくりに汗を流している。

「子どもたちが集まるところには、必ず親御さんも出てきます。特にこれまで地域との接点を持たなかったお父さんたちが、積極的に施設づくりに関わってくれるようになったのがなによりですね」と白幡自治会長の黒田啓三さん。回覧板を回しあうだけの従来の町内会の付き合いでは見えてこなかった多彩な人材の発見も、大きな収穫だった。

「よこはま三万人アンケート」の中の、「二〇一〇年頃における地域との関わり方について」という質問では、「地域での問題について相談したり協力したりするつきあい」「子育てやお年寄りの世話などで助け合えるつきあい」など、地域の連帯を重視した答えが上位を占めた。

身のまわりの生活環境を見つめ、住みよい環境づくりという共通の目的を持って、地域に積極的に関わろうとする新たな地域コミュニティづくりが活発になっている。白幡緑の会のように、「行政に『してもらおう』のではなく、行政を巻き込んで共に考えていくという、新しいスタイルの地域自治に根ざしたまちづくりが、今後は当たり前になつていくに違いない。

成熟した市民を育む、成熟した地域づくりには、まず市民が行政のさまざまな計画に本格的に参画できるような仕組みづくりが必要のようだ。

## 第3章

ひととまちとのいい関係

# 「安、近、楽」時代の余暇

### 余暇活動も手軽が一番

五年前とくらべ、横浜市民の睡眠時間は五分短くなり、反対に余暇時間は七分長くなっている。

総務庁が五年おきに行っている「社会生活基本調査」(平成三年度分)では、こんな生活の変化が浮き彫りにされた。労働時間も二、三分減っているから、余暇時間への比率が相当増していることがうかがえる。週休二日制の導入などによる労働時間短縮の動きや、仕事優先から個人生活優先への意識の変化などによって、人々の余暇・レジャー活動への関心の高まりは確かなものになってきたようだ。

では、睡眠時間を減らした市民はどんなレジャー・ライフを楽しんでいるのだろうか。「市民生活行動調査」によると、全体の「休



手軽な娯楽として人気のカラオケは、いまや家族や友人同士のコミュニケーション手段としての役割も果たしている

海と人とのふれあいをテーマに、さまざまな娯楽施設を整えた「横浜・八景島」は、海洋性レクリエーションの拠点として注目を集めている



日の過ごし方」では、家ではテレビを見たり、家族団欒を、外出の場合は買い物、外食、ドライブという過ごし方が上位を占めている。二十代は友人と、三十〜四十代はファミリーで休日を過ごしている人が多い。パブルの崩壊で、市民のレジャーは、近場で、家族そろって楽しめる、「安い、近い、楽しい」ものが主流になっているようだ。全国的な余暇活動の傾向を九二年版「レジャー白書」で見ると、外食、国内旅行、ドライブと、やはり手頃なレジャーが受けている。それに次いで人気が高いのが、カラオケとボウリング。ことに近年の「カラオケ」の伸びは著しい。

### 伸びるカラオケルーム

七〇年代に歌の練習用から始まったカラオケは、後半にエコーをきかせる機械の登

場によって「飲み屋カラオケ」として第一次ブームを迎え、八〇年代にはレーザー・カラオケなどハイテク技術の進歩とカラオケボックスの登場によって、第二次ブームを迎える。同時にカラオケ年齢のすそも一気に拡大した。

そして、第三次ブームといわれるいまは、グループだけで楽しむカラオケボックス、カラオケルームの人氣が急上昇。警視庁保安部の調査でも、この一年だけで、カラオケボックスの営業所は二六%も増加という。空間のない市街地では、ボックスではなくビル内のルーム型のカラオケが流行で、横

浜でも、市内のあちこちでカラオケルームが目立つようになった。市民の日常的なレジャーとして、カラオケ愛好者は少なくなってきた。

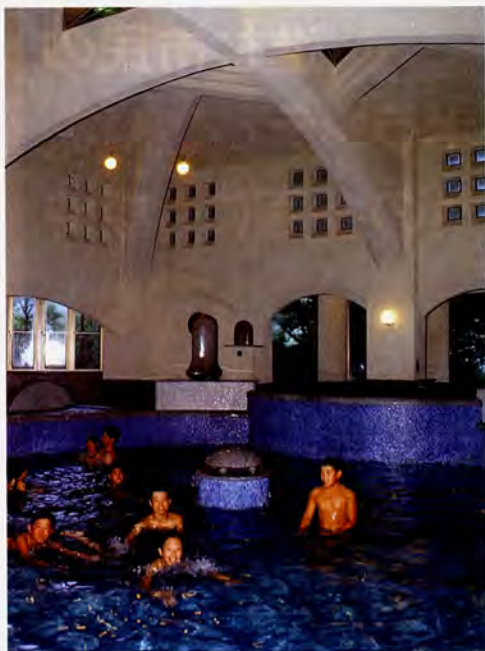
土曜の夜、繁華街のカラオケルームをのぞいてみた。若者のグループ、家族連れ、若い女性たちのグループなどでほぼ満室。女性だけというグループが多かったのに対し、男性だけのグループはなし。空き部屋待ちの家族連れに話を聞く。

「きょうは娘の誕生日なので」五人家族を引き連れてきた日さん。家族で楽しむのは、「一体感が持てるし、安上がり」だか

らしいのだぞうだ。高校生の娘は、月に一度は友人たちとカラオケルームで盛り上がりつついるという。「みんなで流行っている歌を合唱するのがストレス解消法」と。

カラオケ大手のクラリオンの「カラオケ白書」によれば、カラオケルーム利用者の大半は高校・大学生、若いサラリーマン・OL、主婦。中でも一番の利用者は二十代のOLで、月五回以上という人が一四・二%もいる。昼間は主婦がトップ。井戸端でグチをこぼしあうより、好きな歌を歌いあう。これが現代の主婦のストレス解消法のようなのだ。

カラオケは、コミュニケーションの添え物ではなく、家族や友人で楽しむものになりつつある。子どもからお年寄りまで、あらゆる年齢層に対応できるようソフトの幅も広がり、高齢者福祉、生涯学習にも活用され、新しいコミュニケーション形態を生んでいるようだ。青少年の健全育成などの観点から問題点も指摘されているが、家族



「上郷・森の家」は、緑あふれる環境のなかに宿泊施設も整った自然体験型の市民施設。数種類もある風呂や焚き火を囲んでのサロンが大人や子どもたちに人気だ

そろって楽しめるものとなったカラオケは、すでに市民の余暇の一部となっている。

### どんな余暇を過ごすかは、あなた次第

ところで、市民は休日にはどのような余暇を過ごしたいと思っているのだろうか。

再び「市民生活行動調査」を見てみると、「休日にしていなくて、してみたいこと」として「観光地・レジャー施設等に行く」「スポーツ活動をする」と答えた市民が多かった。一方、「レジャー白書」によれば、「充実させてほしい余暇施設」第一位は「森や緑など自然が多い公園」という。『安楽』の時代には、身近な自然と親しめる施設があることを望む人が多いようだ。

横浜市でも、民間活力を導入しながら、市

民が手軽に自然の中で充足できるよう、さまざまな施設づくりを進めている。動植物とふれあう場としては、「金沢自然公園」

「横浜自然観察の森」や各地域の「市民の森」を。また、農の風景の中で憩う場所としては「寺家ふるさと村」を。また、宿泊もでき、野外活動も楽しめる本格的なレクリエーション施設として、「上郷・森の家」が平成四年七月にオープンした。一方、海辺には、「海の公園」や、水族館やマリナーを備えた「横浜・八景島」(平成五年五月オープン)など、ウォーターフロントを活用した海洋性レクリエーションの場も整

備している。これらの施設は、市民の主體的な余暇活動支援のひとつとしてつくられたものである。余暇の充実にはまだまださまざまな問題をクリアしなければならないが、余暇時間をどう過ごすかは個人の自由。そのためにも、余暇情報の充実を図っていくことは、行政の今後の課題となるようだ。そして、いま市民に求められているのは、それぞれのライフスタイルの確立であろう。流行に流されない余暇観の構築が、これからの余暇社会のあり方を決めることは間違いないのだから。

●男女別余暇活動時間

(時間:分)

行動の種類	男			女			
	昭和56年	昭和61年	平成3年	昭和56年	昭和61年	平成3年	
横浜市	3次活動	5.27	5.54	5.59	5.24	5.48	5.58
	積極的余暇	1.11	1.09	1.12	1.03	0.57	1.05
	在宅型余暇	3.17	3.31	3.31	3.20	3.33	3.38
	交際、付き合い	0.27	0.32	0.35	0.24	0.28	0.29
その他の活動	0.31	0.42	0.39	0.36	0.49	0.47	
全国	3次活動	5.33	5.59	6.08	5.15	5.36	5.44
	積極的余暇	1.05	1.03	1.12	0.49	0.47	0.55
	在宅型余暇	3.31	3.42	3.48	3.32	3.37	3.41
	交際、付き合い	0.26	0.31	0.31	0.22	0.26	0.27
その他の活動	0.30	0.42	0.38	0.31	0.45	0.43	

(社会生活基本調査・総務庁)

●週休制形態の推移 (労働時間制度等総合調査・労働省)

注:週休1日制には、1日半制が含まれる。

無回答 (%)

